
正直者とサイコメトラー

こころう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正直者とサイコメトラー

【Nコード】

N9794V

【作者名】

こじろう

【あらすじ】

辺境の海に浮かぶ島、石動島。そこに一人の少年がやってくる。その島は、普通に学園生活が送れないと判断された少年少女達の最後の砦だった。少年は『思っていることが口に出てしまう』という病気であり、その島へと送られる。そこで彼は様々な人と出会う。

プロローグ（前書き）

友達に何か小説を書いてくれ、と頼まれたので、ここに載せます。

二次創作の方もできるだけ早めに書きますので、どうかご容赦くださいm (_ _) m

ブローグ

絶海の孤島、というものを生まれて初めて見る。

僕はマッコウクジラよりもいくらか小さいであろう漁船のへりに立ち、太陽光線により皮膚をあぶられていた。

「ああ、海が青い……空も青い……」そしてついでに僕の顔色も青い。

生粋のシティっ子だった僕は船を甘く見ており、胃の中から熱いパトスが湧きあがりそうな旨を船長さんに申し上げたところ、船室からつまみ出されたのです。げろげろ。

母なる海をほんの僅かに汚染して波に揺られることしばし、とうとう目的地である石動島に到着した。宇宙飛行士が帰還の際に地面とキスする気持ちがよくわかる。汚いからするつもりはないが。

テンションが上がったので意味もなく港にジャンプし、着地した時フナムシを踏んだ。いくらか冷静になったので足の裏を地面とこすりながらざつと周囲を見渡す。崩壊寸前の漁船を除けば浜辺と崖しか見えない。典型的なクローズドサークルだ。

電波は届かず、連絡船は月に一度。警察署なんて洒落たものは有る筈がない。完璧だ。統計から考えるに、これで僕が探偵だったならばほぼ百パーセントの可能性で殺人事件が起きるだろう。どこの調査かは知らん。

しかし残念ながら（？）僕は探偵などではないただの十七歳であり、

怪しげな館の主から招待状を賜ったわけでもない。

だというのに何故僕が片道五時間をかけてまでこの島まで来たかというところ「おら坊主、荷物忘れてんぞ」船長がボストンバックを投げつけてきた。抱きかかえるように受け止める。地味に痛い。

「あとそれともうひとつ」

なんですか？ 船長。

「小さい船で悪かったなこのクソ坊主」

おおっといけない。口に出ていたようだ。

いやーすみませんね船長。実は僕ってば思っているのを口に出してしまう悪い癖が……って、あらもう船を出しちゃったよ。悪いことしたな、いや、言っちゃったな。

頭の後ろをがりがり搔く。黒い髪の毛はたつぷりと光を吸収し、非常に熱くなっていた。

まあ過ぎたことを気にしても仕方がない、と半ば強引に思考を切り替え、改めて島全体をじっくり眺める。港には小舟が一艘自信なさげに浮いているだけで、誰もいない。砂浜にも中国語が書かれたゴミ以外何もなかった。

……船を侮辱してしまったという理由で無人島へと方向転換したのではないと信じたい。

念のため崖の上も確認する。そんな所にいたらいたで怖い。

「ん？」

今、一瞬人っぽいものが見えた気がしたのだが……気のせいだろうか？

「あんな所に人がいるわけないか……」

きつと暑さに頭がやられたために見えた幻覚だろう。間違いない。投身自殺した人の霊などではない。うん。怖くなんてない。

それでは気を取り直して、さあ行こう。

石動島。ここには少々問題のある学生を集めた学校がある

僕はその学校に転校してきたのだ。つまり僕には多少問題ある、らしい。まあそれは今重要なことではない。

深呼吸してみる。地球温暖化によってふんだんに熱された空気が肺を焼いた。

これからの新生活に期待を膨らまし、夏の陽射しの中、大股で歩き始める。

そしてふと思った。

どこに行けばよいのかと。

ウミネコの鳴き声が古びた港に響き渡る。

——僕の新生活は、遭難というなかなか波乱万丈な幕開けだった。

第一話

「……そして三時間経過」

リングワンダリングという現象をご存知だろうか。森の中で歩き回るといつの間にか元の場所に戻ってしまうアレだ。

僕は砂浜沿いを探索していたのだが、港より歩くこと数十分、僕が行く手に森林が立ちふさがった。

どう見ても人の手が加えられていない森だった。森というより樹海って感じだった。ジャングルと言っても過言ではなかった。踏み込んだら最後、死ぬまで出られそうになさそうだった。

しかし、その時の僕は正気ではなかったのだ。

『僕は光合成なんぞできん！ もう直射日光はこりごりじゃー！』と叫んで森に飛び込んでいった自分を殴って埋めたい。

そんなわけで、日の光がほとんど差し込まない森の中で僕は頭を抱えているのである。

「とりあえず木に登ってみよう」

このまま白骨コースは勘弁願いたい。できることはなんでもやってみるべきだ。

枝や出っ張りの少ない大木を登るのは大変な作業ではあったが、命がかかっていると思えば大した苦勞ではない。掌をすり切りながらも、周りの木より頭一つ分高いところまで上り詰めた。

うーん、建物は見えないな。

遮蔽物がなくなったことにより日光を直に浴びながら、僕は周囲の景色を見渡す。しかし目に入ってくるものは緑色ばかり。人工物はまったく見当たらなかった。

これはひょっとして本格的にやばいのでは？　と思った（口にも出ていた）時、僕の頭に天啓がひらめいた。

そうだ、太陽の位置から方角が割り出せるじゃないか！

太陽は東の空から昇り、南の空を通過し、西の空に沈んでいく。今の時刻は三時過ぎ。ならば太陽の位置は大体南西あたりと考えていいだろう。我ながら冴えている。これでこの魔の森からも脱出可能だ。

そして、あとは学校に向かって進むだけ、と思っていた時代が僕にもありました。

「なんてことだ……方角だけわかってても現在地がわからないんじゃない意味がない……」

というか、そもそも学校の場所を知らない。終わった。

そして僕が『せめてワンダーフォーゲル部って何をする部活なのか知りたかった……』と木の上で現実逃避を始めた頃に、その人物は

現れたのだ。

「ぷっ、くっく、はははっ！」

「のわっ!？」

下から急に笑い声が聞こえるものだから危つく手を滑らせそうになった。

「だ、誰かいるんですか？」

「ちょ、キミ、さっきから聞いていれば、くっくく」

た、大変だ。さっきまでの独り言を聞かれていたとすれば恥ずかすぎる。いつからいたのだろうか？

「えっと、キミが『うーん、建物は見えないな』って言ったあたりから」

ほぼ最初からだった。

「まあとりあえず下りてきなよ。いつまでもそんなところにいちや危ないよ？」

それもそうだと思い、下から聞こえる声に従って地面へと慎重に下りていく。

下にいた人物を見て、僕が抱いた感想は『お嬢様学校に通っている女の子』だった。白を基調とした清楚な服が映える黒いロングの髪を揺らし、上品に佇んでいる。この密林の中ではひどく場違いな存在に感じた。

本当にこの少女があのか快活な声をだしたのだろうか？

「で？ わたしに何か聞くべきことがあるでしょう？」

「はい？」

急にそんなことを言われても……ああそうだ、アレを聞かないと。

「ワンダーフォーゲル部ってなにをする部活なんですか？」

僕がそのことを質問すると目の前の少女はずっこけそうになった。どうしたんだろう。

「ど、どうしたもこうしたもないよ。あなたは誰なんだ、とか里はどの方向なんだ、とかそういうことは聞かないの？」

「ああ、そういえばそうですね」

「……」

少女は呆気にとられた様子で口を開けている。どうしたんだろう。

「あははははっ！」

笑いだした！？

「ちょ、ちょっと、遭難しておきながら最初に聞くのがそれって、ぷつくくく」

「はあ、どうも……」

少女はよほどツボに入ったのか、腹を抱えながら爆笑している。もはや最初に抱いた『上品なお嬢様』というイメージは完全に崩れた。

「ワンダーフォーゲル部っていうのはね、えーっと、そうだねえ、地球防衛隊的なアレだよ」

「マジっすか！？」

地球防衛って部活動ですることなのだろうか。

僕が疑問に思っていると少女は何故か顔を背けた。

「……やっぱ、この子めっちゃ騙しやすい。好みかも」

へ？

「ああうん何でもないから気にしないでね。それで、一応確認しておくけど、君って今日この島に転校してきたんだよね？」

「あ、はい。港まで船でやってきたのはいいものの、そこから道に迷ってしまいました」

僕がこれまでにやってきた苦難の道のりを説明すると、少女は目を

覆い、苦笑いしながら天を仰いだ。

「んーっと、ゴメンね、それうちの先生のせいだ」

「え」

「いやね、今日も普通に授業を受けてたんだけど、放課後になった時に急に先生が『あ、いけね、そういえば転入生が来るんだった』とか言いだしちゃって」

まだ見ぬ先生に言い知れぬ不安を感じた。

「本当は先生が港にまで迎えに行く手筈だったんだけど、『ああもういいや。めんどい。さすがに遭難なんてしねーだろ』って迎えに行くのやめちゃったんだ」

「すみません、その人ほんとに教職者ですか？」

はははと笑う少女。反論しないのかよ。

「それとわたしは彼方。少女じゃないよ」

……どうやらまた口に出ていたようだ。

「えっと、僕は……」

「ストップ」

名乗りを途中で遮られる。ひどい。

「その前にこの島でのルールを説明しておくね。まずこの島の中では苗字を名乗る必要はないんだ」

「苗字を名乗らなくてもいい？」

そういえばこの人も彼方としか言わなかったな。

「そ、この島に来たってことは、キミもちよつと訳ありでしょ？だからみんなそういうことは詮索しないのが暗黙の了解なのさ」

「なるほど……」

それは非常にありがたい。ありがたいが、僕の場合うつかり言ってしまう危険が高すぎる。気をつけねば。

「僕は準っていいいます。右も左も北も南もわからぬ新参者ですが、どうぞよろしく願います」

「……そういえばキミは迷子だったね」

彼方さんはそう言うと、笑いながら森を指差した。

「ほら準くん、よく見てごらん。獣道、あるでしょ？」

指の先ををじつと見つめる。鬱蒼とした茂みの中に、確かに人一人分ほどの細道があった……なぜ、今まで気づかなかったんだろう。

両手についてうなだれる僕。ぼん、と手を肩においてくれる彼方さ

ん。優しさが目にしみるぜ。

「この道をまっすぐ五分ほど行ったら学校に着くからさ、行っ
ておいで」

「ありがとうございます……って、彼方さんは学校に戻らない
んですか？」

「少し野暮用があるんだ。わたしのことはいいから早く早く」

「はあ」

何でこんなに急かすんだろう？

「急かしてなんていないってば……くくっ」

彼方さんの妙な態度を気にしつつ、僕は獣道を進んでいった。

——彼方さんは嘘をつくのが大好きな人である、ということはしばらく後に知った。

第二話

「なぜだ……なぜ僕はまだ森の中にいるのだ……」

彼方さんと別れてから三十分ほど経過した。歩けど歩けど目的地は影も形もない。五分も歩けば到着すると言っていたのに。

まさか騙されたのではないか、と考えてから思い直した。初対面の人間を騙して何の得がある。

しかし、現実問題として僕は絶賛遭難中であり、食糧や水などの消耗品もほぼ使い切ってしまった。普通にピンチである。

足元をチラッと確認してみれば『私には毒が含まれています。食べられません』と全身で自己主張しているキノコがあった。

「……」

頭を振って悪いイメージを捨て去る。

「道自体はまだ存在しているからどこかには続いているはずなんだけど……」

というかそうであってくれ。

僕は希望を捨てずに暗い森をひたすら歩き続ける。

——そして、唐突に森が切れた。

「あ……」

強烈な紅が網膜に飛び込み、思わず目を細める。しかし、決して閉じることはしなかった。

僕の知らない間に世界はその様相を変え、空と海はその鮮烈さはそのままに、朱色へと染め上げられていた。

そこは切り立った崖だった。淵から下を覗き込むと、僕が最初によつてきた港が見える。どうやら森をぐるりと一周してしまったようだ。

「もう、夕方になっていたのか……」

その夕日は朝でも昼でも見せぬ表情で、海へとその身を沈めようとしている。

僕は現在の自分の状況も忘れ、ただ目前の幻想的な光景に心を奪われていた。

綺麗なモノが好きだった。

言葉を失ってしまう絵画も。

息を吞んでしまう音楽も。

そして、心をうばってしまふ風景も。

綺麗なモノ触れていると何も考えなくていい。

頭が、思考が止まってくれる。このうるさい口も。

いつまでそうしていただろうか、気がつけばすでに日は沈み、目に少しばかりの光が焼き付いているだけとなっていた。

「……いけね、青少年みたいなことしちゃった」

誰に言うでもなく呟き、そして遭難中である自身の状況思い出して落ち込んだ。何やってんだよ、こんな時に。

僕が自己嫌悪に駆られていると、不意に後ろの茂みから音が鳴った。

「うおっほっ！」

完全に油断していた僕は奇声を発しながら飛び上がる。

な、なんだ、狸か？ それとも鹿か？ ……まさか熊か？ 最後のだけは御免だ。

ガサガサ。

ごくりと喉が鳴る。出てくるのは鬼か蛇か、呼吸を止めて見守った。

しかしそれつきり気配は消え、代わりに何かが走り去る音が響いた。

なんだったんだ？

僕がその茂みの傍に行くと、驚いたことに懐中電灯と、一枚の紙が置いてあった。

その紙を手取る。

紙に書かれていたのは、一文の文字だった。

『学校は、逆方向』

「…………マジ…………？」

「だーっはっはっはっ！」

以上の言葉が、僕が死にそんな思いで辿り着いた学校に所属している教師が発したセリフである。

こともあるうちにこの教師、夜の森を懐中電灯一個でくぐり抜け、ほうほうの体だった僕を発見して大笑いしやがったのだ。ひどすぎる。だがその教師が女性だったのは予想外だった。彼方さんとのやり取りで何となくズボラで適当なんだろうな、と想像できていたからだろう。ジーパンとシャツの上に白衣を羽織った姿を見て僕は呆氣にとられた。

「まあまあ、ほらアタシも悪かったって。あんぐらいの山なら簡単にここまで来れると思ったんだよ」

僕の背中をバシバシ叩きながら言い訳をする先生。反省の色はない、ってか痛い。

今僕は学校の宿直室で水分補給している。独り言が多いのでのどが渇くのだ。

流石に僕が体力の限界だというのを察したのか、引きずって（ここ

重要）連れてこられたのだ。あの細身の体からは想像もつかない馬鹿力を持っていると思われる。

ドゴン↑拳骨の音。

「誰が馬鹿力だコラ」

「い、今のはどう考えても拳骨の音じゃない……」
というかまた口にてていたのかよ。

「ふうん……調査書どうり、本当に思った事が口にでるんだな。お前」

悶絶している僕を華麗にスルーして話を進める先生。ちくしょう、僕がMに目覚めたらどうするんだ。

「その時はアタシ専用のサンドバッグにしてやるよ」

「すいません勘弁してください」

僕らの力関係が決まった瞬間だった。

「ああ、そっぴや自己紹介もしてなかったな。アタシはここで教師、寮母、用務員、事務員、養護教師やつてる榊原だ。呼び方は好きにしろ」

「じゃあボブサップで」

ドゴン

「すみません調子乗ってました、先生と呼ばせていただきます……
あとツツコむの遅れましたけど、なんですかその冗談みたいな肩書
きは」

僕の質問に先生はやれやれと頭を振って答えた

「しょうがねえだろ、人がいないんだから。言っとくけどこの学校
で働いてんの実質アタシだけだからな？ 責任者は他にいるけどこ
の島に住んでねえから居ないのと同じだし」

なにそのステキな状況。絶対に何かしらの法に触れてると思うんだ
けど。

「お偉いさんは島暮らしがお嫌なんだろうよ。ま、心配すんなって
この学校はそんなにでかくないし生徒が三人だけだから、アタシ一
人でもなんとかなってるよ」

なるほど……ん？

「あの、すみません、今、生徒が三人って……」

聞き違いだと思いながらも恐る恐る尋ねる、いや、まさかね。

「あー、確かに間違いだつたな」

「やっぱりそうですよね、いくらなんでも三人ってのは」

「今日からお前も入れて四人だ」

えー。

第三話

「寮の部屋は勝手に決めとけ、と言われても」

周囲に誰一人いない薄暗い寮の中で呟く。木造の廊下は掃除が行き届いているものの、歩く度にギシギシ音がしてちよつと怖い。ビビりで悪いか。

閑話休題。

僕はこの学校が全寮制だと聞いていたので、生活用品の類は一通り用意しており、すでに寮生活の準備は出来ている。

なので、早速寮母でもある先生に寮まで案内してもらおうと思ったのだが。

『面倒。どうせ部屋は余ってたから適当に決めとけ』とのありがたいお言葉を受け、こうして孤独に寮内を徘徊しているのです。

このままでは埒があかないので、そこらへんのドアをノックして空いている部屋を教えてもらおうかと悩んでいると、

「やつほー準クン、昼間ぶりだね」

どこからともなく笑顔の彼方さんが出現した。

「……楽しそうですね」

「そりゃそうだよ、なんせ久しぶりの転校生なんだし。ただでさえウチは生徒の数が少ないしね」

本当に三人しかないのか、いやそれよりも。

「彼方さん、あなたの教えてくれた方向って真逆じゃないですか！」
一体全体どうということなんだ、と彼方さんに詰め寄る。

「あーうん、多分あれじゃないかな？ 蜃気楼的なアレ」

「蜃気楼が起きても方角は変わりませんよ！」

「細かいこと気にしちゃだめだよ」

僕の命は細かいの部類に入るのだろうか。

あははー、と笑ってごまかす彼方さん。僕としてはまったく笑えねえ。

釈然としない思いを抱えながらも、まあ一応反省はして……いると仮定して、わざとではない……はずだ。多分。

「……ほんとにゴメンね、わたしがすっかり方角を間違えたばかりに、準クンに辛い目に遭わせちゃって」

そう言って、彼方さんは目を伏せ、俯いてしまった。

……ざ、罪悪感が。

「いえいえ、全然平気です！ やっぱりあれですよ、森の中での有酸素運動ほど健康にいいものはないっすね！」

「……ボソツ、ちよろいな」

ん？

「許してくれてありがとうね、準クン！」

「え、はあ」

なんなのだろう、この腑に落ちない感じは。

「でさでさ、準クンはこんなところで何やってるのかな？ 夜這い？ 青春の暴走？ 一夜の過ちを犯しちゃうの？」

「例えそうだったとしても彼方さんはないです」

この人との付き合い方がなんとなくわかってきた気がする。

人間、距離感って大切だね。

「ふむ、わたしの推測によると、自分の部屋をさがしているのかな？」

「そのとおりです」わかってんじゃん。

「新しい子が来るって聞いたからさ、わたしがすでにキミのための部屋を用意していたのだよ！」

自分でババーン、と効果音をつけていた。

……まあいいか、普通にありがたいし。

「わざわざ気遣いくださってありがとうございます」

「うんうん、みっちり感謝したまへ」

腕を組んで偉そうにしている彼方さんに苦笑する。

まあ、悪い人じゃないみたいだな、この人。

「ほら、すぐその部屋だよ。開けてごらん」

指し示された扉の前まで移動する。この寮は周りが古ぼけた木造なのにも係わらず、扉だけは金属製だった。妙に威圧感があるな。

なにわともあれ、ここから僕の新生活が始まるわけだ。

ほんの少しの不安と、多くの期待を胸に、僕は扉を開く。

部屋の中には着替え中の女の子がいた。

「ジーザス」

扉を閉めた。

息を大きく吸っては吐き、吸っては吐く。クールになるんだ、僕。あまり効果はなかったが、幾分正気を取り戻すことができたので、下手人を睨みつける。花の咲くような笑顔だった。おいアンタ。

「弁明はあるか」

「てへっ」

反省も後悔もしていない。ダメだこいつ。

「そんなことよりもさ、見た？ 見たよね？ 感想は？」

「言うちに事欠いてそれか」

この学校の生徒は僕の想像以上にクセが強いということが判明し、頭を抱えてしゃがみこんだ。誰か助けて。

だが、都合よく仏は蜘蛛の糸を垂らしてくれなどしない。

「——それは私としても興味があるわね」

背中にドライアイスが突っ込まれたかと錯覚した。それほどまでに冷たい声が背後から響き渡った。

僕はしゃがみこんだ態勢のまま振り向けない。ぶっちゃけ怖い。

「あ、和泉ちゃん！　それがねそれがね、この見ず知らずの男が『ふへへ、JKマジ最高』って言いながらキミの部屋に押し入ったんだよ！　わたしは必死に止めたけど！」

「冤罪すぎるわ！」

やっぱりこの人は信用できない。

しかし、彼方に（さん付けも敬語もいらんだろう）騙されたといえど、着替え中に部屋に押し入ってしまったのは事実。ここは誠心誠意こめて謝るべきだ。

「えっと、和泉さん？　あの、ほんと、わざとではなかったのですが、けれども、このたびは大変失礼な真似を」

「黙りなさい」

一刀両断。

「なにか勘違いしているみたいだから言うておくわ。私にとって、あなたが彼方に騙されていようが、謝罪の意味があるうが、心底、どうでもいいの」

出来の悪い生徒に言い聞かすように区切りをつけて説明してくる。

僕はといえば、透き通るような綺麗な声だな、と場違いなことを考えていた。現実逃避とも言っ。

「私が貴方に聞きたいことはただ一つ」

「な、なんでしょう?」

ゴクリと唾をのむ。

「——見たか、見てないのか」

生か死か、それが問題になっているらしい。シェイクスピアも真つ青の二択だ。

「もし、見たなどと申し上げたならば、ワタクシはどのような扱いを受けるのでしょうか?」

「とても子供には聞かせられないことをするわ」

賭けてもいいが、絶対にエロいことではない。

「まず手始めに貴方を社会的に抹殺します」

手始めの時点で僕の人生は終わった。

というかアンタ何者だよ、社会的に抹殺って。

「ちょ、ちょっと待っ」

「待ちません」

取り付く島もない。

このままでは彼方の謀略により大変なことになる（僕が）。そう思った僕は、とっさに胸を張ってこう言った。

本当は高校生とは思えない大人びたネグリジエから色気たっぷりのショーツまで全部バッチリ見たけど、「見てません！」

「……」

「……」

空気が凍った。

「ねえ彼方」

「なあに？」

「ひょっとして……僕、やつちゃった？」

満面の笑顔でサムズアップ。はは、終わった。

「いやね、少し言わせてもらっけどさ、僕が今日この島に来てから苦難の連続なんだけど、それは一体どういことなのかな？」

「楽しそうだね！」

「アンタが一番楽しそうだよ！」

「その下郎」

「はいい！？」

下郎って僕のことだよな？　とうとうそこまでランクダウンしたの？

「こちらを向いてもいいわよ」

……思ったよりも優しい声だ。

ひよつとすると、情状酌量の余地があるのかもしれない。

緊張しながら振り向いた僕の視界に入ったのは、細い足と膝小僧。

「へ？」

ドゴオッ！

「うわゝ、振り向きざまのシャイニングウィザードって、準クン死んだんじゃないの？」

彼方のそんな声が、意識が消える寸前に聞こえた気がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9794v/>

正直者とサイコメトラー

2011年10月9日11時52分発行